

未来への遺産

中央図書館事務部 辻 由 実
収書・整理課

2013年6月22日、ユネスコの世界遺産委員会は審議の結果、日本の最も美しく雄大な山富士山を、構成資産としての三保松原を含め、世界文化遺産に登録することを正式決定した。

満開の桜や瑠璃色の湖面から望む富士山、中腹まで雪に包まれた富士山、そしてダイヤモンド富士など、季節や天候、時間帯などで様々な表情を見せ人々を魅了する富士山は、日本の美しい景観を代表するものであり、日本人の美意識、信仰、文化に深くかかわり、古くから芸術的作品や文学的作品に数多く描かれてきた。

世界自然遺産ではなく、世界文化遺産とするこのユネスコの決定を、私は順当な決定であると納得し嬉しく思っている。

大阪で生まれ育った私の富士山の思い出といえば、やはり中学3年の修学旅行である。連日雨天の中、富士の湖畔を巡り、五合目までバスで行ったが、富士山の頂上が見られたのは、全旅行行程を通してその五合目からのほんの一瞬であった。当時はさして残念な思いもなく、はしゃぎ疲れて帰って行ったことを覚えている。

4年前に娘家族が東京へ引っ越したため、上京する機会が増えた。嬉しいことに上り新幹線の左側車窓から富士山が見える。のぞみの予定通りの走行で、富士山に一番近づけるのが、新大阪から1時間40分のあたり、静岡駅通過後かなり走ってからであり、意識していると富士山は案外長く見られる、しかし夏場はほとんど見られないということもわかってきた。絶景スポットではないにしても、ついうっかり見逃したときは、新幹線代を恨めしく思うほど、車窓からの富士山は私の上京時の楽しみになっている。



車窓からの富士山

かつて、中央図書館で大変お世話になった大先輩であり、お友達でもあるA子様と、昨年11月、東京で再会できることになった。定年退職後、千葉県に住まいを移されたA子様には、年賀状で近況をお伝えするだけであったが、ここに来て東京という接点が浮上した。再会の話はとんとん拍子に進み、“はとバスツアー”でスカイツリーに上りましょうということになった。

バスツアーの前日、御茶ノ水の東京ガーデンパレスのロビーで私たちは20年ぶりの再会を果たした。翌朝早い出発にもかかわらず、私たちの思い出話は夜遅くまで尽きなかった。

634mの高さを誇るスカイツリーに着くと、私たちはより高いところへと、第一展望台からエレベーターを乗り継ぎ、地上450mの第二展望台まで上がった。そこから真下を見下ろしたとき、私は身が竦み、あわてて視線を上げた。そこには今まで見たこともないような広大な街の眺望があり、その中を橋が架かった大きな川がカーブして流れ、東京湾は朝陽を受けて平たく赤く光っていた。展望台の回路を左にゆっくり回っていると、視界のかなたに、その頂から優美な白い光を放つ富士山が浮かび上がるように見えた。思わず手を合わせたくなるほど神々しいまでも気高く壮麗な姿、予期せぬ対面で、ここでも私は富士山が特別な山であることを実感した。

スカイツリーのあと私たちは、浅草寺、ホテルバイキング、湾岸ドライブと楽しく日程をこなした。A子様のお蔭で実現した私の昨

秋の大切な思い出である。



スカイツリー展望台からの街の眺め



スカイツリー展望台からの富士山

標高 3,776 m の我が国最高峰である富士山は、噴火を何度も繰り返してできた成層火山であり、およそ 1 万年まえに現在の美しい景観がつくられたといわれている。そして今後も火山活動が発生すると考えられている。そこには原生林をはじめとする多種多様な動植物が生息しており、それらも貴重な富士山の構成資産である。

世界文化遺産に登録されたことにより、富士山の自然が今まで以上に守られてゆくことを願っているが、いま地球上では、大気や水、土壌の汚染、二酸化炭素排出に端を発する地球温暖化など、環境上の負の遺産による自然破壊が着実に進んでいる。自然を学び、自然を守り育み、共生を探ることは、人類にこそ与えられた重要な課題であり、責務である。

日本最古の和歌集、万葉集の中にも富士山を詠んだ歌が 11 首ある。いにしえの人々もこの聖なる山に畏敬の念を抱きつつ、強く惹か

れ親しみを感じていたことが想像できる。

自然は絶えず移りゆくものではあるが、富士山が美しい姿のまま後世に引き継がれていくことを私は願って止まない。



漁ではありません。プレゼンです。